

雜
兵
物
語

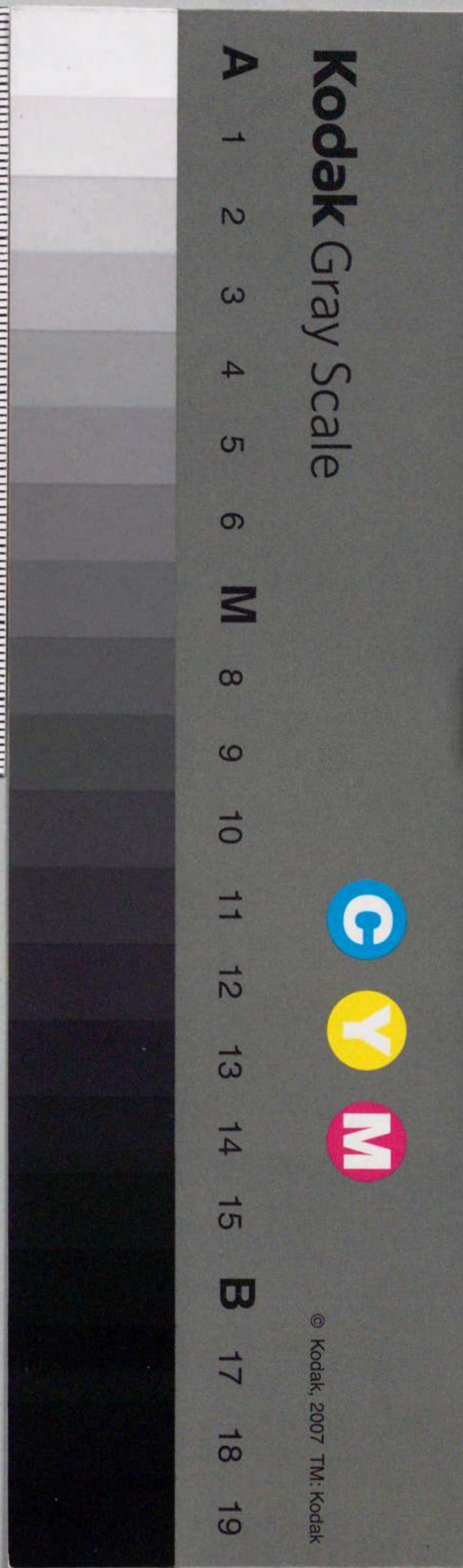
乾

內務省圖書	
號.....第	
類.....部書	
函.....	
冊.....二	

和書門	
二七五八六	
二五九一	
冊架函號類	

內閣文庫	
番號和	27561
冊數	2(1)
函號	189 248

189-248



國

明治十一年購求

雑兵物語上

鉄炮足輕小頭

杖とていふも後だうい推量とてかたりんば中事とて安めき
 もよひふまでい水産かいが首ふ引愈た珠^{たま}杖^{つゑ}玉の猪目とあり
 のま申へある櫃よりこしめされい胸の海ふ玉うりせとて鉄
 炮^{てう}た^ため^められ^れか^かい^いも^もん^んた^た又^又常^と小^こ角^{かく}小^こ向^{むか}て^てた^たど^どく^く振^ひふ^ふ早^{はや}く
 かたどきめさるるかこい^いと^とたま^まい^いと^とひ^ひい^いち^ちめ^めて^てり^りた^た玉^{たま}と



朝日出右衛門

たどき捨たひ振ふをわめあまう津定のごとく鉄炮をう
 く時でとなめい袋を捨なまかニぶちて替^か棚^{たな}杖^{つゑ}と二本
 てとも本でもちめ袋の口かすはれをめて右の編^あ小^こ後^ご井^い
 羽^はの^のす^すい^いこ^こあ^あは^はは^はの^のこ^こん^んで^であ^あき^きな^なま^まれ^れよ^よ振^ひふ^ふあ^あし^した^たら^らが

おだ福ふ命のあまのいづらひその梅干一つ大切にして思
合の茶ふさんだとして居ては川をめぐりてなほあまた
梅乾と云てとす喉がかわくぬいぢうば死人の血でも
又たごらのすんだよめでもすくはて振かされ梅干は
左陣中一つでさるゑと胡椒粒の左陣中日殺福を
入包いぞ夏も冬も胡一粒づか志まじびしは換ふも
あてられおた福ふは梅干とはららひておいふ入
包いぞ又唐辛とおははぶして尻が足の爪さきまで
ぬきばこゝろいひんぢぞふもぬらしたるよめぬい
が三川をぐりて目ざんとといどつた付血月おがわいふ
すく包いそ

鉄炮足輕

夕日入を束つ

今日も川越がまべい小胴丸と首小付べいさるがせうい
屋川と具足とさうて口茶入の付包をまゝあいで常鉄炮
とらぶく討の極よ笠を引かづりて後銃を首(門)懸べい
くとまけれど銃が纏てかけられぬいおで銃を引切て首小
ひひつけた胸板ふらつと付らまをまゝさいでせうい屋川
だつて進でい鉄炮をおといまれまい又早合の茶はまを
がちだす屋いたち斗でまぢいけ長陣小野小と山よめ
ゆさる屋い小大塔の中おてゆじのこげもとあら者
が有ぐい討いお速其はくれとあ(胴)茶を各斗のせて
火を流りれを毒氣を争はんのか物ごそれもおと

りきまきりやいねたて



弓足軽小隊

先弓射者ハ首小川無と珠投玉の緒目を急り此中

大川源を東

一何たる松小なりうーわされい胸の通りよ玉が何進を強よ
川急てうういよ進をいよのど相又ら此勝負がうしうし
い先かうら小弾池をひ川ら里舟て歌る遠き内ハ観
の業いふ物だちまが渡すよーいいて近く多川て観の
矢をーきめされい必由定のるより遠く射がくす近き分
わらーがす常一射をいめさるー一倍もたぬと思
つて射めさまいいきわひよ無ていづ矢射捨まじきと
疾炮二挺のるへう一人宛は川をー玉業のるをど
きりきまう二挺の流炮と一度小矢をーき出さずい松よ
るどるどきめさまいうももどる進をい程近くお川つわ
屋い時よた右へきて射めさまいた右へから車うあか

い時ハせりそちへひーい歌れ右の方かうまじき思が
右の方を防ふい物ご馬上の歌ハ先馬流射めされい矢
程はきんとする時を一つの矢を川はめていゆーゆ
てハひ川はる流を一筋の矢をたむらてむきとソが流
死ぬたいと思ふ時を流をけより近くおつはめてすきる
と観ひて放つたー相ご池をい頬っ下散のものまじ
すきるを秘ひて突めさまいその後ハ刀でも秘拵を
持て先舟小ひん扱てふう是を秘つて切へー甲は志額
切へく流舟は流るうけてなまう物でいきれぬものだ又
貴らちませ川いまごちうくと押もやもすさーけ小刀
ありとも持てまをれ立てら進をいと云るゆもまいしんだ

どくし舟で流る流る姫きりきり

弓足輕

小川流を門

昨日弦をもち久た時ち川り弦小折目せほけたが一放
ちどきたまはばを候うきれし一弦ハ既分念入た弦だ
おま目がち川くとほいたまむ二もあ一たもどくれず
うきまうこゆぬ弦よりがよしをいと見へし智の
弦がふけてし小折目のほろい板小をうし弦をもち
かへほい又けらハ不こほま包で六尺五寸をえくよ板
の巻き間竿よ用うたわのらだん包いあしる竿の
いへい時けらを心弦を下よしでる弦う川包いまたよ
尺板作のらと解らんをけらだん包いぞ





徳カウキ擔小頭

長柄源内在末

各の腹中ふあぐいまたと思ひ申せとお志やう極よとお経
 鬼やうとらふこのよを持たし居る申す申す徳は徳
 負うたうまうまう先か徳のさやを胸板へ入おまうま
 長き筋も刀の後小腰小刀をさんだがよかんをい
 先徳の内てとよく勝負のそごまうハ新侍礼の徳だ
 そ徳又徳をいれりんとと斗思ひ成る各心成ひと
 して徳先れそらひ中極よ栲子を合て上より成極よ
 たつきあさまい必はくをいと思ひ成るを人即人
 の出合れ時ふ若徳枝の多くそらはく時ハ栲子をそら
 へて打つよりおハかいぞ徳又歌の栲相成たつき為極よ

してふかふいとある馬上の歌を、紫のうしろを馬に
ゆと接ぎ流きとも縁為す危い下流つきの歌は歌を
崩して後かればとて一可なり遠くハ退る成るいかり
とのだと思ひ中も、や馬下と一不やおつりま川で此
二色と能く情を出てまのりたふよかん危いと存中が
如何者ぐいもま違ふい又常く小目釘小心を付けてぬけ
い振ふ志めさまいまをり胴金あり小目釘のぬけうい振ふ
ぬりせしめさまい熱て沖持港かつきハ江戸出りてと
沖道貝代者とて高流うりて屋川こちすまじと相まて、
頭もの、おで我役よ、たさまい救港ハ己がま、小港をぬ
まより海をぬさういので歴この沖侍元と替ち又いぬん

ご程小能く腰背を流すしておられぬい振よ覚悟を志
ろ又沖持港うき、必く我用小たてた、ハうろたへ老
の腰ぬけ回おだ程小後生一大るま、ハ川うりて働、
な、ハ手柄だそ此二色れわけと情、ハて後一は川いん
ておけ

持港擔

吉内左馬

銀指の沖持港をハ川擔、ハおま、ハ川弟跡で眠、ハ内銀の
上運輸の令とハ川もあさね、ハ成死衆よりおこみそれ
危いとも替人だ程小歌を定めほけたいと、ハ不
可成者、ハ一務も、ハらかして、ハ不を候を、ハく、ハ馬に
太腹人、ハハ、ハ人、ハハ、ハ運輸が、ハ、ハ柄が、ハ、ハ港を、ハ、ハ

危いところたまに垣首がひ川かつて流るの腹もこ
ぼいのすし小がうさぐさスシ酢桶がふとくたくましくしてせ
のかしらもろろをかりでかゝる流浅ひ川たらく来た是
を念ふあんだがあんとすべいと思ふ小は合とすしスシ酢
を更かぎ流を持って只今流をわつこと足へて右は右
の目玉うら血をながりし所同つひのちんを馬小繋てこちよ
くら危ひちいづる雨て是ハ幸子あんどと思つて左うら突
危いぢうばうら流で流る危いと思ひ右は右より流
の柄をおつれ並し石突のかうぞ首のちい雨は目利して
芭蕉先此雨紙かむと突た連は先へ玉斗流人ぬいてす
危いてころんだ程小鼻先を流ひひいでうら鼻血が

でた是もころんごが仕合と流を持って程すりたぐバ又馬
かにげ危いぐさ川をうらて流をさるひさおで馬がうらこ
ろんだ系もま川さう程は打落てぬんが川と雨て程
くびせうく程は首をひ川いたが大綱指は首をうらうこ
川りきづいものた鼻足のとよ小綱指をさきけらるを
かあんど此首を寝首かくや引ひらねどる目や
さや危いと思ふて百系小のりて左のりてくらびせ押
へ右のりて大綱指を抜危いくとすまことおびうゆら
くてさやがすらすき抜た雨で綱指ハ二尺さやが
を人あしりもる危い雨て三尺のりて身をて抜く
危いなまものさやで銷こいれ破てひ川を抜くおぢ難義が

あんどちんと遅いおまの首が落るい尚世のさや母は
さう角がかりしういといひくき落すさう角がをるい
あんどちんがさやをさくぬけぬいさの球とさくか
けさや小杉釘でもお屋いり此日揃括やりい此首此まの
たが先取小杉釘が首い亮子にさくいといひてくれい
あんど返くも浪括の逆輪一つで既よ命とさくい
と一二年のうちに侍流の物倍小合浪の括も能かひ
めんどといひあうらうらむをさくあんど今思ひあたる浪括
の括はけ括子更があら合浪括の刀脇括と味方小寝首
いかりやといひせめて靴や洗の金具は川をげても兄若
い身だがカや洗のかき物よいといひげらあんど又きさ
つはいがも又款の馬り洗底を負て片目ひ川はさきた
と思川い此洗のかきが尚て右の目がつぶきたといひ
免角小物一板めいもさぬあんど洗小括あまはる上
の洗よハ又け括子損があらあんど依て武具よさり
きつひがあらあんだ

教洗擔

助内在あつ

若内くそのかき洗はさうい靴をは川もあたあんど
あんどけさやい洗持洗のさやい熱て洗法度で合洗
場で洗道具拾うい括小洗の靴のちんさいといひ是れ胸
板いさの長き靴がさうい腰小をさげると洗定だあで
完前の洗持洗の右靴だが胸板うらさうい出してけり

港は後家入小舟のそわがらその備をスル小舟も港の
 さやを控ないやうにと流法度があるとしてかこひれ港
 控う後生一大すし小大を毛の鞘二つい毛れ鞘をになり
 た港控と有又繩をひて首小引控りけし中らもあるあ
 中でせさい川の鞘をせお川た港うきぎがさういせんご
 暖うさ切屋いと志し南世港のさやの目小立がる發や
 まとい小成とそ大きき鞘のそやふり抜き実小かれを
 うすもはんぬけら遠くかひ下はんかひで港控が右
 鞘をせおひて難義をすうあんだる結きこりかひひて
 大きき港の鞘がこやらう合照いさないこふく小港乃
 鞘はるふる種をはんたけし極ま何とほけらいが厚り

檐の為よらういせんご





旗元馬験持

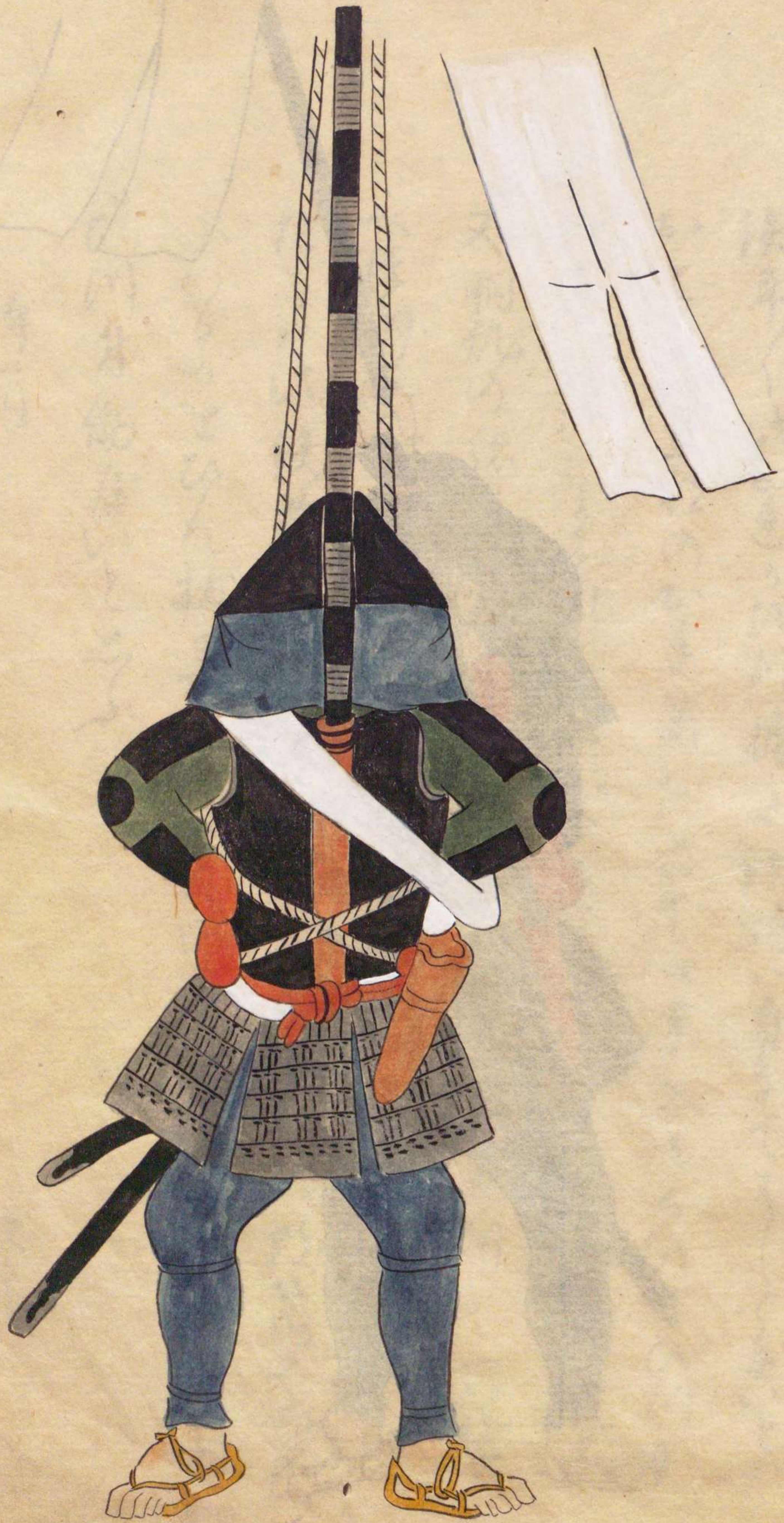
孫藏

ちがふ屋いと思ふ時お柄立うまははれをり持屋い押
 前が志のつた小詰筒よはれをわ屋い今日ハ風がかりよは
 ろいハ手繩をりけてひれもる屋いそくくか川あふは
 馬中も旗も一ツ小かりてこもあふ屋い長柄を以て
 歌をハ実をりふ屋い

馬中持旗元

孫藏

押前ハ志のつた時ハ詰筒がよいかわよまやい時ハ柄立
 卒へはれをりて持が猪子小まのりとも争かたうた
 を旗をひんまつてひれかろく屋い歌を返出のりていそ



かくかきくぐいかりハ旗もる下も一両は杯まうて長
 柄をかきよすなにいそけれまがせなりよひのせは袋
 の中(津旗)二流入てせおつたが一つをばえんおて輝
 口ひの指りけし今をワいまじせおめているに
 そのあううおまじも袋小二つ入たを一つをば竿小はら
 えうて一つをせなりふひのけし



持筒

筒平

鉄平くけおまじひ川橋、鉄炮ハ自分でもうくはいとハ
 おとらぬ具取のお子筒だ所では茶入もくびまひ川が
 けまは流がまどれて具取のあうまひ川か、あつゝあつゝ
 又羽取の流もよごまうそまらかん屋いと思つて、つ袋
 一はのえんて、腰より引分こはまども、務負も通くなら
 たらハ、け鉄炮ひ川くろき、たろハ、足軽流の、教筒の、あ、
 小からうせひん、抜具是の、あ、あ、て、鉄炮をハ、腰小
 ひ川、あ、あ、い、と、あ、あ

持筒

鉄平



筒形くまがりし雨をぶきしむる小志しる鉄炮を配た
 而て腰小をひのえさゆきまじりしおまじりかたはし鉄炮ハ
 腰よハ中ししをゆきまじりしおまじりかたはし鉄炮ハ
 て後丸中しし時小鉄炮を腰小ひのえさゆきまじりし
 せむしへひのえさゆきまじりしおまじりかたはし鉄炮ハ
 而て難美をくまがりしおまじりかたはし鉄炮ハ
 けきかへくまがりしおまじりかたはし鉄炮ハ

鉄炮

筒形



持弓

矢を射る

御持弓といふものハ枚弓といハ是様り習へいゆんごぞ先
 御弓一法流矢一線ハ目形ハあけ居い今一法と一線とを
 人の御弓御習矢だ程小後生一大子小ひ川橋でい
 居いぞまゝ弓立ハ彼よまゝいゆんごとそや控居いとわ
 りふな珠敷うちがいと云尺手扱と線以何とをせな
 う川へけて腰の刀をん御居いぞ

持弓

矢を射る

矢を射るがふとそと枚弓といちがふとあんどご自分の用小立て
 射へいと思ふと不覚様たんだい又安小おのひ高し夏が



あついでにせせ居いぞいふは法智の御り清かくなたを
 いふまでもひ川かづいて居居いとも思ふまお侍危の事
 の人があんでいふは清た^清を請て今一張の清り一
 腰の清矢を渡す居いとあふぐその時ハ隙よたつべい
 不で刀をぬく居いも自由だとあふぐあんと矢たあつ
 如何あつぐきかな

単履取
 赤六郎ハ杖箆をゆりされしを成せあつて剝刀フツサまできか
 えさげしおましらも箆履の役又又せおひ物成りし赤
 六郎はよか人徳を志しつゝ刀脇指に指指を志しつゝ
 指をうしむゆも指ごか曆くの侍礼を具足の上小刀
 脇指をさしつゝつらつらつそれと小脇指也腰高をひて刀成
 川舟やうりし赤六郎やおましらハ具足をきつらが大ききあんと
 腰高などハあつたけやうすすぐな刀を具足に上ぶさ
 てち二天むいの刀も扱やいゆんごおましがわつたさうんご指
 こしてハおあ人の刀も扱はるいぞ先具足を志ておれ
 がんや危いそ具足より先より脇指をひつゝさんて扱

単履取

赤六郎



その後、羽織をきり、極々具足をさるもの、日本國が
久安治て刀をきり、ふひ川、うかひ、すすむが子
い、尚世、濁釣の根子、刀をかう、い、是のかと、をた、く、と、
皆、歴々の侍、流を、中、男も、ま、川、す、ぐ、子、梅、の、根、子、刀、を、え、
出、ら、る、その、刀、を、上、帝、小、指、て、ら、中、く、扱、い、あ、て、歌、を、え、
て、お、め、く、登、い、と、ま、れ、ど、も、お、め、け、て、皆、扱、い、あ、て、中、ど、
こ、を、し、て、ま、を、切、又、ら、刀、を、お、よ、い、て、是、を、切、め、の、も、あ、る、あ、
で、根、指、を、い、序、と、切、お、す、べ、い、と、ま、れ、を、具、足、の、上、に、序、と、
で、ハ、切、お、す、い、よ、い、り、て、双、が、う、い、り、て、何、も、す、べ、い、度、が、な、
くて、隙、を、者、が、多、か、い、その、中、小、を、人、刀、に、め、け、る、い、と思、つ、
て、ま、せ、う、り、ひ、ん、ず、と、ひ、川、を、下、よ、な、り、上、お、め、う、俵、を、ら、

び、を、し、こ、が、あ、り、あ、せ、ら、れ、て、扱、指、を、い、て、突、登、い、と、を、扱、
登、い、と、志、し、る、陣、中、ハ、目、小、立、が、よ、い、ま、ん、ぶ、と、を、大、金、丸、
蓋、と、い、ふ、大、禪、小、金、丸、を、お、い、そ、う、川、た、が、その、禪、が、は、川、を、り、
ぬ、て、扱、お、め、う、ち、よ、か、く、と、首、を、こ、と、ま、た、又、を、人、ハ、下、よ、
く、を、ふ、せ、ら、れ、た、道、ど、是、ハ、卷、而、人、た、と、思、入、て、な、ま、す、は、く、
る、登、い、と、を、大、き、子、小、刀、を、さ、い、と、あ、で、下、か、う、その、小、刀、を、ひ、
む、扱、て、下、敷、の、る、う、り、は、く、と、を、の、道、し、よ、よ、の、り、て、登、
道、の、名、の、ま、り、を、く、な、や、よ、志、て、は、し、一、敷、た、を、子、刀、を、具、
是、の、し、小、指、を、き、り、る、胃、ハ、只、是、を、人、た、を、介、する、の、上、で、刀、
を、ぬ、く、を、見、ま、た、を、皆、系、た、る、小、切、先、を、切、お、す、手、負、二、百、
多、か、う、こ、し、を、見、ま、た、は、や、ぶ、釣、の、し、よ、よ、刀、又、ハ、小、根、指、

お具足の上小さうしてはよかりなると思ふ彈のたひ小版
指せさうしたくはさるそいはず小法ん抜なひ又大きき小
刀もがひは極があるあゝ小版指さんと代為しこ時を用
小を登いおんご汰お具足の上帯小大きき刀脇指を必
さぬぬのござ具足の忘帳を教へるよりいかに下知乃
たひよむきとするの鞍をとり具足をぬがなひをさず
小をさすゝ思登いぞ

挾箆持

汰六去清

は度清涼の涉伏小お挾箆を清ゆされなむめて首箆
こるこ線解りやせあつこ昨日その挾箆持やが人ぬ小
たいごうやうりせして挾箆をゆち破て中の道具を

皆う川うれた割ゆんずつてころんどあで平松株
のごとく小ゆんづぶられて血屋などをでくもき出しこさ
まともそのまゝ法を立てこころでをを定おひ小してお
果す登いと思つこころづこがそあ中でも喧嘩口辯禁
割ぶとつんで其法度と思ひ出しておめくこ
ほげて堪悉こがわがあ中での涉除を不中及後ホ
てと侍輩中での喧嘩口辯は望く涉禁割たをその故
を割小おいらひも死なない財ハ涉除の時不てをさう
よい思ふ存分小お果登いもさだあで法度だあ
あ他の人殺をおひやしておめくこころづこはして堪悉
たうりつても門あせし細後をす登いあこが己が鏡背

次第より小なり。危いよ縁後と又法度のきくところの
だん危いる去詠よ向てき定も付るを他の人殺と
いふても打果すもな後でいふ其の他の人殺と亦
果すも御公儀様へは是も此の弁ぬ。ゆへにけいごふ
く小代の侮いませういふかおんごといふおれら
ヶ根小煙きほらぐらとあさ^{おん}か^ん成事難有あ
た陣更刀を一筋中^りだ是でいふせがひがほす
ぬ。種小弁度小もむをらくはまげ中まいされもおま
編指の柄をお江戸を出る時あつてかつてが毎回
手袋の金物よりつりて其後柄系がきけり合戦だと
いふ死もんごといふおんご思ひの印は死あして今小命

生て種より其の目ねとお旗本だあであ小先おん
かよ遠くて鉄炮より言もろくよきこらういづれ
こく玉がまの飛できこく費目斗の玉目たらけが
舞先(高てあともほろして死つて)種だあで死
危いとあつても中しく卒およこころをさすでもな
柄系のきまいたも死るい時が難儀だ柄をほつるめ
危いと思ふと刀危い今い高て迷惑だもけ刀此柄の
ことく小代さん危い命かぎりある危いものを今度
一帯ていふあつてあんとすべし思ひ出さ編指の
てきつるいで序の付だあで柄の寸天のよ一帯
あつて柄の細い序の付だあで柄の寸天のよ一帯



糸をひ川ほら^{ナカ}いて中心^{ナカ}なけ小柄をひ川ほら^{ナカ}殺のか
 すも小すいかづのほら^{ナカ}もあん^{ナカ}危い^{ナカ}定^{ナカ}川^{ナカ}通^{ナカ}て^{ナカ}二^{ナカ}
 巻^{ナカ}小^{ナカ}も^{ナカ}ま^{ナカ}く^{ナカ}危^{ナカ}いと^{ナカ}あり^{ナカ}ふ



馬取

金六

沖出陣の時小取とよとの武士あつ身小ひのけけ
 る道具ありあついの先馬ひ志や鼻捻腰よひのを
 さし響よおもひひの繩をちりけて首小川無腰等立繩
 刀羊小まきしひの添て抄へりそ又馬母ハ左の口徳も小
 西通小米を入て右の口徳も小小汝炮筒筒たよ門けら跡
 の口徳も左右よハ大豆袋ひのまげう前輪小ハら胸丸く
 らる身後輪小鞆飼の楯袋り又と不背左右の口徳も
 川無てうごつちり取小ひのけかまさし繩帯小川無け
 先母て馬せひ川流かひ小界草たちぎしよた川をわめ
 をむ時ハ響せゆけひ川をちりけとあげおもひひの

此れ則ち密をかませ居い候初小る浅たて居いとそか
袴をふんごませ居浅の向をふきあい用心をこらち馬を
ふりたるせバ大きき山をぎ小成あんどその上でハ軍が
負小成居いとてかひ小湯禁割たを能く引つたげ是れ
念のため雨でふそ沈のゆすせおねがむま居いゆんご
とかりとかかり沈持てこかいうたふき雨がなきて
沈が一足もふいりずをぶれおれし時沈をひ川括り分ち
是情をこらち又鞍後ハ系あふして隠すてあいがゆい
且取の安草小と志子あつたふかかん居いその時ハあ浅
をひ川をわして武人ちあ相ふしべつを能くたて道
具浅大事より

馬取

後六

今六が沈をきけを今思ひ出しと度がある様達が生れ
て七款もたふあひひおぢの表懸及り人法をまじり
たを耳の唐小女に五年たておけしが今思ひ合をまを
いし陳中小女日氣の首沈括て法子ゆい雨は氣がういれ
かき進てそれくと二人三人云程こをあまをそれが先
てふやめし雨で歌が法ん中と思ひて一ふ二ふ深立
て品た程ふそのつとの備下いゆかかめ居いと思つてし
い子先子の人扱小入湯の人下跡の備が大仏の扱子人
あたと云ても前まきてきてし程小友前小成てむびへ
と沈をゆりてふ六万の大軍が十日跡斗敗軍たと云

想及が流るなりき来たが令去が馬小念を入らむを
らんど廿日嵐一丈でう人足たふましてアサ日嵐れが
たは百双倍もある屋い馬一丈をかけたん屋いなりい去
百人の大軍子日地も敗軍すい程小西國のましかる
どまて崩ても固がたふすい大車のかんご法度小も
馬を取らふさぬやふと空く法禁割だた必念を入
てるひんごもや想て陳中小小款せり多もやの語り
を法禁割だも言程あせまといと去車だもあふ去本
と屋い法禁よりぢらといふもけるたと云むうけ去去
人が皆腰抜でいあふまいその内小せ初めの強い人るも
あつ屋いが去先を武人があをいぶがそれが大隈小がうて

跡てあゆむこつとまかいゆんごとと人く馬を能くひの
らみする志の子細も言法引けりまらた時の覚悟だも
又且程が言の屋いひのまきやちりめし時のあまの跡は
あて何もひのひく屋いそのがたひ刀もを本ひのまき
た程小も款を料理しあいと信しあんぶおまはるを
はま捨人ルれてえさうがあく小依て覚悟がちふあだ
今武家の水也のんで殊又陳中へはんやうが想て侍流
のえらんご討死が小柄だときいさか令去つたたと死を
あいのんたをたうのちよバ款がかよいきあつて使が
はくを味方と隠宿神が川つりしがは損がしを何んを
して死ぬ丸款を人あも殺世二人も使だ程まらう



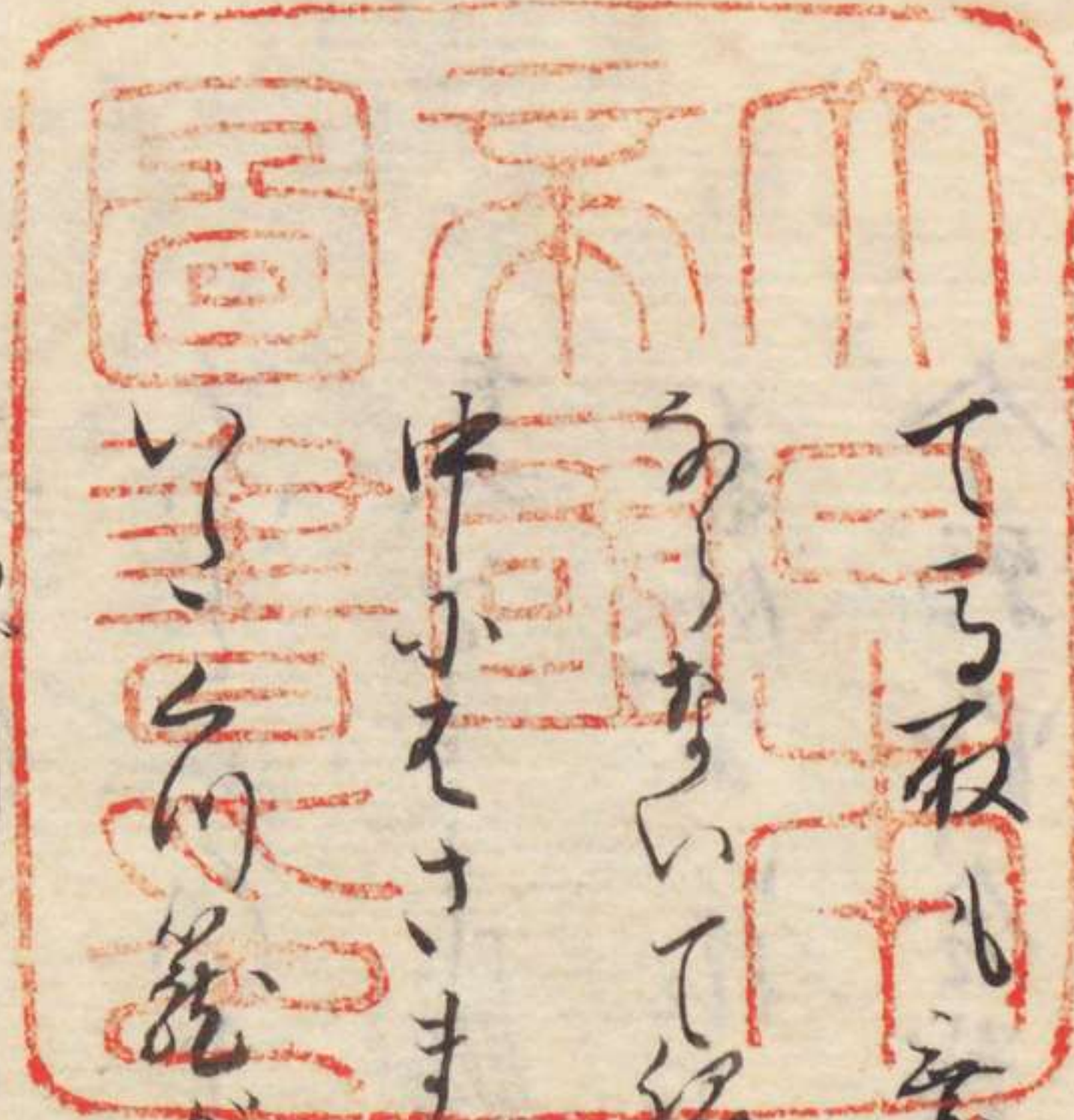
たいちふら百人てそへり教せぬが腕骨次身たをき
 人ともうはけを命斗控屋いも腕病だぞた死
 祢む今迄の杖持方が矢墜ツライふ成屋い程小能合照せり



皆持

吉六

月川ちのハ皆籠流ゆりしきりて皆袋をせおひ中ハ程よ
 身の備が自由自立小ぬ中た多共又小も武備をまげず
 まいと思ひ中剃刀をまねひ何をさんた程小あんなる
 妻をも一屋いとわぶが能あしくと武造よりなる乃
 弟外をい振ふる程ひ中がた達が武造の身一どけるハ
 今物野合戦小おの流ま川は時斗せし合が有たが
 款ハおのちしかりまてまげたがいは骨折た程小大
 夏もかいとくひわすたい腹のさけらもかまをたひそ
 をせ屋いが一交小多くか何しりるん屋いけ振す時を
 ちのくく切く小かりて夜も立流のそゆせしせなひか



急いそゆやていあすうひまきそ用ふまなひりんだ又
 余所の菅籠抄をみるふ扱くあまはる大俊なこんじ菅
 籠をかりしそ居る門に款が来て首をすうとそい出
 たりまいけ中の押籠よそのの備を馬が一足きをん
 てふ取も余もあや浅なりして志川めたが一切おどく
 あつたいて籠のうすまをさそきまた時菅籠持わつるの
 中ふえまされてゆまれおい扱よ再げまらるる所でか
 いふの籠さるの志ううらあたるて程もともがいきか
 ひつういおそ持がなる何た刺さるんで菅籠をゆち
 破たおきつるふゆでいそ程よあの扱る時をなむや
 金むどのたりよなりやすむい

上巻終

